

第15回 職業アレルギー研究会

東京大学医学部内科物理療法学教室
会長 教授 宮 本 昭 正

第15回職業アレルギー研究会 実施要領

1. 会 期 1984年7月20日(金)～7月21日(土)
一般研究発表 7月20日 10:00～14:30
特 別 講 演 7月20日 14:45～15:30
シンポジウム 7月20日 15:30～18:00
(観 劇) 7月21日 11:00～
2. 会 場 東京 高輪プリンスホテル 貴賓館2F「松の間」
東京都港区高輪3-13-1
TEL 03-447-1111
3. 参会の方へ (1) 演者変更の場合は、スライド受付の際、係へお申出ください。
(2) 一般演題は、講演10分、討論5分とし、進行は座長にご一任いただきますが、時間厳守をお願いします。
(3) スライドプロジェクターは1台です。スライドは原則として10枚以内とします。
(4) 研究会当日中に雑誌掲載用最終抄録(1,200字以内、図表2枚以内)および100語以内の英文抄録を提出してください。
(5) 研究会費として各施設1万円、および出席者1名につき1万円を当日納入してください。
(6) 研究会当日、この抄録集をご持参ください。

第15回 職業アレルギー研究会日程

7月20日(金)		7月21日(土)	
9:00	世話人会	9:40	〔観劇 希望者のみ〕
10:00	一般演題 (8 題)	10:00	集合 バスにて歌舞伎座へ
12:00	昼食	11:00	観劇
13:10	総会		
13:30	一般演題 (4 題)		
14:30	休憩		
14:45	特別講演 産業と呼吸器アレルギー		
15:30	シンポジウム 産業構造の変遷と 職業アレルギー (5 題)	16:00	観劇終了予定
18:00	休憩	16:30	東京駅着(バスにて)
18:20	懇親会		解散
21:00			

午 前 の 部

世 話 人 会 (9:00~9:55)

開会のあいさつ (9:55~10:00)

会 長

宮 本 昭 正

一 般 講 演

SECTION (I) (10:00~10:30) 座長 国立病院医療センター

可 部 順三郎

1. INH(isoniazid)による職業性喘息の1例

長崎大学第二内科

浅 井 貞 宏
木 谷 崇 和

下 田 照 文

2. イソシアネート(ISC)による過敏性肺臓炎(HP)と 気管支喘息(BA)の臨床免疫学的検討

京大胸研内Ⅱ

藤 村 直 樹

泉 孝 英

SECTION (II) (10:30~11:00) 座長 県立広島病院内科

城 智 彦

3. ハブテン修飾白血球を用いた新しい職業性アレルギーのモデル

東大物療内科

Northwestern大学

秋 山 一 男

J.J.Pruzansky

R.Patterson

4. 清酒醸造作業従業員にみられた酒造用糖化酵素製剤による職業性喘息の1例

名古屋保健衛生大学

梅田内科

末 次 勤
上 平 知 子

山 田 美 穂

杉 浦 元 孝

SECTION (III) (11:00~11:30) 座長 昭和大学内科

高 橋 昭 三

5. 実験動物アレルギーの発症頻度に関する検討 (第三報)

近畿大学第4内科

大 石 光 雄
津 谷 泰 夫

高 木 洋 徳

中 島 重 徳

6. 犬・猫に過敏性を有する獣医師例について

国立相模原病院

臨床研究部内科

佐 藤 博 央
信 太 隆 夫

油 井 泰 雄

SECTION (IV) (11:30~12:00) 座長 近畿大学第4内科

中 島 重 徳

7. ホヤ精製抗原の抗原決定基ならびに分子量と粘膜反応の関係について

県立広島病院内科

城 智 彦
小 泊 好 幸

桑 原 正 雄

広島市廿日市町

広島大学工学部

広島市

大竹市

勝 谷 隆

岡 智

大 塚 正

坪 井 信 治

8. ホヤ喘息の減感作療法において使用抗原の違いが治療効果と 特異的IgE、IgG抗体量におよぼす影響について

県立広島病院内科

城 智 彦
小 泊 好 幸

桑 原 正 雄

広島市廿日市町

広島市

大竹市

広島大学工学部

勝 谷 隆

大 塚 正

坪 井 信 治

岡 智

————— 昼 食 —————
————— 午 後 の 部 —————

総 会 (13:00~13:30)

SECTION (V) (13:30~14:00) 座長 国立相模原病院臨床研究部内科奥 田 稔

9. 台湾ヒノキ材による鼻アレルギーの一例

県西部浜松医療センター耳鼻科	宇佐神 篤
日本医科大学耳鼻科	奥 田 稔

10. 配合肥料工場勤務者における職業性喘息について

大分大学保健管理センター内科	中 村 晋
県西部浜松医療センター耳鼻科	宇佐神 篤

SECTION (VI) (14:00~14:30) 座長 東京大学内科物理療法学 伊 藤 幸 治

11. トマト喘息の1例

群馬大学第一内科	長 沢 亨	中 沢 次 夫
	笛 木 隆 三	小 林 節 雄
利根中央病院	黒 岩 源	稲 垣 護

12. ナシ・リンゴ栽培従事者の職業性花粉症に関する

疫学的アレルギー学的検討 (第1報)

佐久総合病院アレルギー科	堀 俊彦	大山 碩也
--------------	------	-------

————— 休 憩 —————

特 別 講 演 (14:45~15:30) 座長 東京大学内科物理療法学 宮 本 昭 正

「産業と呼吸器アレルギー」

群馬大学第一内科	小 林 節 雄
----------	---------

シンポジウム (15:30~18:00)

〔産業構造の変遷と職業アレルギー〕

座長 独協医大アレルギー内科	牧 野 莊 平
熊本大学耳鼻咽喉科	石 川 喙

1. 産業構造の変遷と職業アレルギー

大分大学保健管理センター内科	中 村 晋
----------------	-------

2. 養蚕業に関する喘息—作業と肺機能

群馬大学第一内科	笛 木 隆 三
----------	---------

3. 超合金喘息

大阪大学環境医学	日 下 幸 則
----------	---------

4. 鼻アレルギー

県西部浜松医療センター耳鼻科	宇佐神 篤
----------------	-------

5. 慢性ペリリウム肺

京都大学胸部研内Ⅱ	泉 孝 英
-----------	-------

閉会のあいさつ

会 長

宮 本 昭 正

一 般 演 題

SECTION(I)

10:00～

座長 可部順三郎 (国立病院
医療センター)

1 INH (isoniazid) による職業性喘息の1例

長崎大学第2内科

浅井貞宏 下田照文

木谷崇和

症例：池○敦○ 27才女性 職業：薬剤師

主訴：喘息発作

現病歴：生来健康であった。昭和54年(22才)より某院薬剤部に勤務しはじめたが、1年後よりアレルギー性鼻炎発症。昭和57年9月頃より喘息発作が断続するようになった。この喘息発作が薬剤部でのINHの予製・配合・分配と関連があるということで精査を行った。

諸検査：WBC 5700 Eosin 15% IgE 217U/ml 通常抗原45種による皮内反応は綿のみ疑陽性
INHによる諸検査：INH+患者血清による皮内反応陽性(15分後)。皮内反応閾値 10^{-5} 。P-K反応陽性。吸入誘発試験 10^{-4} で陽性。環境誘発試験陽性。対照として他の喘息患者に同様の試験を行ったが全部陰性。

以上より本例はINHを抗原(ハプテン)とする職業性喘息と診断したので報告する。

<MEMO>

2. イソシアネート(ISC)による過敏性肺臓炎(HP)と 気管支喘息(BA)の臨床免疫学的検討

京大胸部研内Ⅱ

藤村直樹 泉 孝英

ポリウレタン塗装工にみられたHP, BA各1例につき, ISCとヒト血清アルブミン(HSA)の結合物を用いた免疫学的検討を行った成績を加えて報告する.

HP症例(52才女)ではTDI-, TMI-HSAによる遅延型皮膚反応, TMI-HSAによる沈降抗体, リンパ球刺戟試験陽性より, Ⅲ型, Ⅳ型アレルギーの関与が推定された.

BA症例(39才男)では, 喘息発作は二相性(作業開始直後, 夜間)であり, 即時型皮膚反応はTMI-, TDI-, MDI-HSAで陽性であったが, 特異的IgE RAST陰性, TMI-HSA吸入誘発試験陰性であったが, アストグラムにて著明な気道過敏性が証明された. またTMI-HSAにて沈降抗体が証明された. 本症の即時性発作には, 気道過敏性が, 遅発性発作にはⅢ型アレルギーが関与しているとの推測も可能と考えられる.

<MEMO>

SECTION(Ⅱ)

10:30～

座長 城 智彦 (県立広島
病院内科)

3. ハプテン修飾白血球を用いた新しい職業性アレルギーのモデル

東大物療内科

秋山一男

Northwestern 大学

J. J. Pruzansky

R. Patterson

Trimellitic anhydride (TMA) をヒト白血球と結合させ TM-白血球 (TM-W) を作製。この TM-W は、TM-HSA に対する IgG 抗体を含み IgE 抗体を含まないヒト血清 (抗 TM 血清) で刺激するとヒスタミン (H) を遊離した。正常ヒト血清では H を遊離せず、また、TMA を結合しない白血球からは両血清とも H を遊離しえなかった。TMA 処置前に細胞表面 IgE を取り除くと H 遊離は著明に減少し、また、TM-IgE を受身感作した白血球からは抗 TM 血清で H を遊離したことより、TMA の主たる結合部位は細胞表面の IgE 分子と考えられた。以上より化学物質に対して IgE 抗体を有さずアレルギー様症状を示す患者における H 遊離の機構の 1 つとして細胞表面 IgE に結合した化学物質と IgE 以外の抗体との反応による表面 IgE の架橋が考えられる。

<MEMO>

4. 清酒醸造作業従業員にみられた酒造用糖化酵素製剤による職業性喘息の1例

名古屋保健衛生大学梅田内科

末次 勤 山田美穂

上平知子 杉浦元孝

48才，男性．喘鳴を伴う咳嗽と呼吸困難の発作を訴えて受診．32年前から毎年秋～春に清酒醸造作業に従事．15年前より，醸造工程の途中で，*Aspergillus*および*Rhizopus*から得られるアミラーゼを主成分とする酵素製剤を使用するようになった．2～3年目より，その酵素を扱うと咽頭刺激感，続いて喘鳴を伴う咳・呼吸困難をきたすようになり，昭和53年4月に一度受診したが，今回精査と加療のため再度受診した．

血清IgE(RIST)1,100U/ml，末血好酸球 3%，同酵素製剤抽出液による皮内反応陽性(閾値は蛋白量で0.001μg/ml)．その他，検索中のアレルギー学的検査成績をまとめて報告する．

<MEMO>

SECTION(Ⅲ)

11:00～

座長 高橋昭三 (昭和大学)
内 科

5. 実験動物アレルギーの発症頻度に関する検討(第3報)

近畿大学第4内科

大石光雄 高木 洋
津谷泰夫 中島重徳

実験動物アレルギーの発症頻度に関し、本学実験小動物飼育室勤務者、これを利用する医師・研究・実験助手などを対象として、アンケート調査を試み、その成績の一部は、すでに1昨年の本研究会などにおいて報告した。その際、回答の得られた96例の中で、明らかに実験動物アレルギーと考えられたのは、気管支喘息、鼻アレルギーおよびじんましん合併の1例のみであった。ただし他にも、鼻アレルギーあるいは結膜炎と思われる症状を訴えるものが6例あり、その中の2例は、ラット上皮に対し、RAST score2を示していた。これらは、当時誘発試験では明らかな反応を示さなかったが、その後追跡調査を行い新たな2・3の知見をえているので、ここに報告する。

<MEMO>

6. 犬、猫に過敏性を有する獣医師例について

国立相模原病院臨床研究部内科

佐藤博央 油井泰雄
信太隆夫

症例は、30才男性の獣医師。既往歴：反復性の扁桃腺腫大。家族歴：姉が気管支喘息、姪がアトピー性皮膚炎。現病歴：学生時代は健康、S.56年3月獣医学部卒業後、インターン開始、同年10月、猫飼育者宅へ往診中、強い乾性咳嗽および喘鳴出現す。その2～3ヶ月前より仕事にsneezing出現するのに気付いていた。その後、しばらくは喘鳴なし。S.56年開業後、感冒に罹患し易くなり、犬、猫診察時に、気管支喘息発作出現するようになり、S.57年4月当院受診した。検査所見：皮内テストでは、HD、猫毛に陽性、RASTスコアは、猫毛3、犬毛4、牛毛2、HD3、モルモット毛2で、猫毛100倍液を用いた吸入誘発試験では陽性を呈した。

以上、獣医師になってから、猫あるいは犬に対して過敏性を呈した症例を提示したい。

<MEMO>

SECTION (Ⅳ)

11:30～

座長 中島重徳 (近畿大学
第4内科)

7. ホヤ精製抗原の抗原決定基ならびに分子量と粘膜反応の関係について

県立広島病院内科

城 智彦 桑原正雄

小泊好幸

広島市廿日市町

勝谷 隆

広島大学工学部

岡 智

広島市

大塚 正

大竹市

坪井信治

ホヤ抗原Gは分子量106,000, 抗原決定基 α , 同抗原Dは9,000, $\alpha + \gamma$ である. ホヤ喘息例に対する皮膚反応はG, D抗原とも強陽性, 粘膜反応はD抗原のみ強陽性を示した.

G抗原をプロナーゼ分解してD抗原大のフラグメントを作ると, これは皮膚反応, 粘膜反応とも陽性を示した.

D抗原を使用し, ポリエチレングライコールによりG抗原大の重合抗原を作ると, このものではD抗原の粘膜反応活性は失活し, 皮膚反応活性は残存した.

皮膚, 粘膜反応とも主要抗原決定基 α と特異的IgE抗体の反応により惹起されるが, G抗原や重合抗原では分子の大きいことが粘膜通過を阻害する1因子となると思われる.

<MEMO>

8. ホヤ喘息の減感作療法において使用抗原の違いが治療効果と
特異的IgE, IgG抗体量におよぼす影響について

県立広島病院内科

城 智彦 桑原正雄

小泊好幸

広島市廿日市町

勝谷 隆

広島市

大塚 正

大竹市

坪井信治

広島大学工学部

岡 智

ホヤ抗原G, E(分子量23,000, 決定基 $\alpha+\beta$), Dを使用し, 同一例で治療効果を5年間, 特異抗体を3年間追跡観察した.

有効率はG抗原47例で78.7~92.8%, E抗原62例で90.3~96.9%, D抗原14例で25.0~44.4%であった. 抗ホヤIgE抗体は季節中に高値, 季節外に低値となる変動を反復し, 減感作による影響はみられなかった. G, E抗原による治療例では抗ホヤIgG抗体量は治療後に急増したが, D抗原による治療例では治療前と差がなかった. D抗原による治療が無効のためE抗原に変更した症例では, 変更後抗ホヤIgG抗体量は急増し, 著効が得られた.

<MEMO>

—— 昼 食 ——

SECTION(V)

13:30～

座長 奥田 稔(国立相模原病院
臨床研究部内科)

9. 台湾ヒノキ材による鼻アレルギーの1例

県西部浜松医療センター耳鼻科

宇佐神 篤

日本医科大学耳鼻科

奥田 稔

木材による気道アレルギーは、米スギ材をはじめとし、すでに10種が報告された。しかし、ヒノキ材は比較的によく用いられるにもかかわらず、未だこれによるアレルギーの報告例をみない。そこで、10年前に和歌山医大耳鼻科において経験した、ヒノキと同属である台湾ヒノキのオガクズによる鼻アレルギー例を示し、ヒノキ材も気道アレルギーの抗原となり得ることを報告する。

症例は31才男子の欄間彫刻師で、就業8年後から、作業に伴い鼻アレルギー症状が出現するようになった。皮内テストでは台湾ヒノキ材のDP法抽出 1:1,000液に卅の反応を示し、他に卅の反応を呈する抗原がハウスダストをはじめ8種みられた。各種の治療に抵抗し、同科を訪れたが、自家製のエキスによる減感作療法が奏効した。

<MEMO>

10. 配合肥料工場勤務者における職業性喘息について

大分大学保健管理センター内科

中村 晋

県西部浜松医療センター耳鼻科

宇佐神 篤

演者の1人宇佐神は、1982年農業用配合肥料を使用し始めて10年後よりこれを撒布すると、鼻アレルギー症状及び咳発作を伴うようになった農夫例を報告、配合肥料並びに杉花粉によるI型アレルギーと考えられた。

今回の症例は配合肥料工場勤務者で、従業時防塵マスクを使用していたが4～5カ月後よりくしゃみ、鼻汁、喘鳴を伴う呼吸困難、咽頭痛、皮膚掻痒及び結膜充血を来し、休日には軽快するが、職場に入ると忽ち発症するため2年後より営業に配置転換した。現場に極力行かないようにしているが、仕事上足を踏込むと再発すると訴えて来院した。初診時好酸球増加はなかったが総IgE 471U/ml、皮内反応は家塵、mite、絹、ぶたくさ花粉に(++)、赤松花粉に(+)であったがRAST scoreは松花粉のみに1、他はすべて0であった。肥料製品及び材料の魚粉に対する掻皮試験は強陽性、RAST scoreも4、貼布試験も強陽性で水疱を生じ数日残存した。しかし材料の骨粉については掻皮試験中等度陽性、RAST scoreは0で、貼布試験も陰性であった。これらの何れに対しても沈降抗体は証明されなかった。以上より本例は配合肥料に対するI型職業性喘息と診断されたが、IV型アレルギーの関与する可能性も考えられた。

<MEMO>

SECTION (VI)

14:00～

座長 伊藤幸治(東京大学)
内科物理療法学)

11. トマト喘息の1例

群馬大学第一内科

長沢 亨 中沢次夫

笛木隆三 小林節雄

利根中央病院

黒岩 源 稲垣 護

症例30才，男．職業：ケチャップ工場のトマト栽培係主任．既往歴：特になし．家族歴：子供2人に牛乳アレルギー．現病歴：昭和48年よりトマト栽培の仕事始める．昭和55年夏(6～7月に強い)に鼻炎症状出現．昭和58年8月2日トマトの茎や花粉のつき方を調べていて，咳嗽，喘鳴，呼吸困難感出現する．

検査成績：IgE 960 IU/ml，皮内反応ではスギ，カモガヤ，ブタクサ，ヒメガマ陽性．スクラッチテストにてトマト陽性．なお室内塵では陰性であった．RASTでは，トマトclass2その他カモガヤ，ブタクサ，アーモンド等で陽性．トマトによる誘発試験では20×(1ml)にて1秒量の49%減少がみられ陽性，またトマトの摂取試験では陰性であった．アセチルコリン気道過敏性試験では5000 μ g，鼻汁好酸球は63%であった．

<MEMO>

12. ナシ、リンゴ栽培従事者の職業性花粉症に関する疫学的、
アレルギー学的検討(第1報)

佐久総合病院アレルギー科

堀 俊彦 大山碩也

われわれは長野県下伊那郡松川町において、ナシ・リンゴ栽培従事者に高率に花粉症がみられることに注目し、全町にわたる調査を行いつつある。今回はナシ・リンゴ栽培の中心地であるU地区、主にナシを作っているK地区およびいずれもほとんど作られていないI地区の三地区合計約1,500名に対して、アンケート調査およびアレルギー症状有症者について皮内反応を行った結果について報告する。ナシ・リンゴの開花期である4～5月に鼻炎または結膜炎症状を有する者は、U地区約35%、K地区約20%、I地区約5%であった。皮内反応では、ナシ・リンゴ花粉陽性者がUおよびK地区で高率にみられ、職業性花粉症を引き起こしている可能性が高いと考えられた。

<MEMO>

—— 休 憩 ——

特別講演

14:45~15:30

座長 宮本昭正 (東京大学
内科物理療法学)

「産業と呼吸器アレルギー」

群馬大学第一内科

小林節雄

産業と呼吸器アレルギーで最も重要な疾患は職業喘息と過敏性肺炎とであろう。この場合のアレルギーは、いわゆるアレルギー疾患であって、必ずしも免疫学的な抗原抗体反応が証明されるもののみでない。まず職業喘息についてその発症機序別に考えてみる。

1. 免疫学的機序の明らかなもの：

- a) I型アレルギーによるもの：これにはコンニャク喘息などたくさん例がある。
- b) 非アトピー性アレルギーによるもの：セメント喘息や小麦粉喘息などの一部。

2. 免疫学的機序と非免疫学的機序との混合機序の考えられるもの：

irritant receptorを刺激したり、 β ブロッカーとしての機序が働き気道の反応性亢進を促進したり、またその一部でI型アレルギーを形成したりなどの複雑な機序を示すものにTDIなどがある。また、MSISとよばれる一連の物質にはこの種のものが多い。

3. 主として非免疫学的機序によるもの：

これには、 SO_2 ガスやオゾンなどの刺激物が考えられる。

次に職業喘息の社会医学的面から、労働不能日数と疾患とか、Medico-legalな問題点を少し述べる。

診断上問診、環境誘発の重要性はもちろんであるがpeak flow diariesの重要性とその面から「反応性の分類」を述べる。

産業と過敏性肺炎の問題は主として非アトピー性アレルギーと考えられるが、抗原物質の化学的物理的性状と曝露量などで決まる。その中で抗原物質が肺胞に沈着し易い大きさで、かつ肺胞マクロファージにとり込まれるがライソゾーム酵素で処理され難いものとされている。いずれにしても、実際の症例についての検討を述べる。

<MEMO>

シンポジウム 15:30~18:00

座長 牧野莊平(独協医大)
アレルギー内科)

産業構造の変遷と職業アレルギー

石川 哮(熊本大)
耳鼻咽喉科)

1. アンケート調査より

大分大学保健管理センター内科

中村 晋

職業性喘息発見のrouteには次の2つが考えられる。第1は臨床sideから臨床家が診療中にたまたま見出したものを蒐集し、これらを帰納してどのような職場環境で本症が発生しているかを知り、類似する職業環境にも未知のものが存在する可能性を考えて検索することであり、第2は職業性喘息が確認された職種について演繹的に該当する抗原に曝露される従業者の健診を行えば各地に同様な患者が見出される筈であり、予防対策と治療を進めるためには何れも重要と考えられる。後者の例として演者らは乾椎茸生産高が全国第1位を占める大分県の椎茸栽培者(路地栽培、ハウス栽培)ならびにその選別包装に従事する業者にアンケートによる健康調査を試みたので、その結果を中心に今後の職業アレルギー対策について考えてみたい。調査回答数683名、回答不備を除く602名につき集計を行い、有症者114名(18.9%)、うち鼻炎症状73.7%、呼吸器症状42.1%、眼症状35.1%で、特に選別包装従事者の有症率が有意に高いことが指摘された。

<MEMO>

2. 養蚕業に関する喘息 —作業と肺機能—

群馬大学第一内科

笛木隆三

キヌ喘息は、キヌの衣服を着用するヒトに生ずる喘息で、その起因抗原は、キヌ繊維の外側を包むセリシンという膠質から発生した粉塵吸入で生ずるが、一方養蚕に従事する農民の中で喘息を生ずるものがあるが、これはカイコがマユを作る直前に排泄する熟蚕尿または、その乾燥粉塵の吸入により生ずる。カイコは幼虫からサナギ、蛾へと変態する昆虫であり、これら虫体および排泄物、キヌ糸はすべて喘息の起因抗原になる物質を含んでおり、これらは主として蛋白よりなる。抗原分析で、これらはカイコの発育過程、分泌物の種類により共通の抗原部分と異なる抗原部分より成る。今回は、養蚕作業の中、どの過程が最も喘息発生に関連しているかを客観的に証明するため、養蚕喘息患者にピークフローメーターを渡し、連日朝晩ピークフローを測定したので、その成績について報告する。

<MEMO>

3. 超合金喘息

大阪大学環境医学

日下幸則

1981年7月から1984年6月まで、某超合金工場について労働衛生学的調査を行い、16名の超合金喘息有症者を認めた。職業性との診断は、喘息症状の経過と超合金曝露の変化との間の明らかな関連性に基づいた。その職種の内訳は、原料工7名、成型工2名、研磨工7名であったが、プレス工と焼結工にはいなかった。曝露開始から発症までの期間は、3カ月から10年までの範囲にあった。喘息発作は、主として夜間から明け方にかけておこった。超合金曝露の全くないところに配転された後も発作の持続するものが2名おり、配転されなかった者の2名は、不可逆的な慢性閉塞性肺疾患に進展した。17名中8名に慢性気管支炎が続発した。1名において、塩化コバルト吸入試験により、非即時型の喘息発作が誘発された。IgE高値、血中好酸球増多、痰中好酸球増が数名において見られたことから、発症にアレルギーの関与が示唆された。

<MEMO>

4. 鼻アレルギー

県西部浜松医療センター耳鼻科

宇佐神 篤

近年の鼻アレルギーの増加における、職業性抗原の意義についてはすでに報告した(第81回日本耳鼻咽喉科学会シンポジウム, 1980年). その後の検討も加えて, 次のような知見を得た.

1. 自験の職業性鼻アレルギーは19種, 62例をかぞえたが, 耳鼻科アレルギー外来の鼻アレルギー総数に占める割合は0.3~3.1%であった.
2. 保険制度の普及および患者の病識, 耳鼻科医の診断能力の向上により, 職業性鼻アレルギーと診断される例は増加した.
3. わが国の職業性気道アレルギー報告例の分析から, 抗原となり得る物質, 鼻粘膜の過敏性を亢進させる物質が職業上増加していると考えられ, これらの物質と関連の強いと考えられる産業従事者も増加している.
4. ストレスや大気汚染など, 非特異的に鼻アレルギーの発病を促す社会環境が形成されてきた.

以上から, 産業構造の変遷に伴い, 職業性鼻アレルギーは増加していると考えた.

<MEMO>

5. 慢性ベリリウム肺

京都大学胸部研内Ⅱ

泉 孝英

慢性ベリリウム肺は BeO_2 の吸入によって生ずるⅣ型アレルギー反応を基盤とした広汎な類上皮細胞肉芽腫形成性肺疾患である。10年以上の経過を経て線維化病変に進展する予後不良の疾患である。我々は、昭和46～53年にわたって某セラミック工場従業員に発生した10例の慢性ベリリウム肺症例を経験している。

本シンポジウムでは、10例の臨床経過の概略について報告するとともに、慢性ベリリウム肺症例にみられる免疫学的所見、特にモノクロナール抗体を用いてのBALFリンパ球所見を中心に、本症の免疫学的成立機序についての考察を試みることにしたい。また、併せて、本症におけるステロイド治療の是非についての私見をも述べることにする。

<MEMO>